

## 博士(文学)学位請求論文審査報告要旨

論文提出者氏名	大川内夏樹
論文題目	北園克衛研究——欧米モダニズム受容の問題と表現方法を中心に——
審査要旨	
<p>申請者の大川内夏樹氏は本論文で、昭和時代に活躍した日本のモダニズム詩人・北園克衛（1902～78年）の欧米モダニズム受容の具体的な事例を調査し、それが北園の作品とどのように密接に関連するかを考察しようとした。北園の欧米モダニズム受容については、すでに多くの指摘があるものの、大半は一般的指摘に止まって、具体的な検証については十分に行われていなかった。論者はこうした研究状況を踏まえ、北園が欧米モダニズムのいかなる文学・芸術作品に接し、受容したかを調査し、それが作品にどのように作用したかを本論文で解明しようとしたのである。</p> <p>本論文は全8章の本論と序章・終章、及び参考文献・初出一覧からなる。以下、各章の概要と達成点を示す。</p> <p>第1章「『記号説』論——モホリ＝ナギ《大都市のダイナミズム》を手がかりに——」では、北園の第一詩集『白のアルバム』（1929年）収録の詩「記号説」をとりあげ、簡潔な語句を羅列する特徴的な表現が生まれる背景に、モホリ＝ナギの《大都市のダイナミズム》受容があったことを明らかにした。加えて、これまで〈抽象画〉のような作品とされることの多かった「記号説」が、〈都市〉を描いた具象的な作品として解釈し得るものであることを指摘した点も有益である。第2章「北園克衛のシュルレアリスム——反復表現がもたらすもの——」では、北園が、フランスのシュルレアリスム詩を受容する過程で反復表現を用いるようになったことを指摘したうえで、この時期の北園の詩においては、反復表現のもつ一種の定型性に基づいて、詩の構造や語彙が決定されていくという特徴が見られることを論証した。第3章「『円錐詩集』論——〈抽象映画〉およびシュルレアリスムとの関わりから——」では、第四詩集『円錐詩集』（1933年）に収録された詩が、〈抽象映画〉を表現上のモデルとして書かれたことを明らかにし、さらに、それらの詩が描き出すイメージの世界が、ジョアン・ミロの絵画や、アンドレ・ブルトンの『超現実主義と絵画』に触発されることで創作されたものであることを指摘した。その検証を通して、従来は未詳のものも少なくなかった『円錐詩集』収録の詩編の初出をすべて明らかにし、それらの詩が発表された時期や状況を確定した資料的な意味も大きい。</p> <p>これに続く第4章「『鯉』論——「伝統」との関わりについて——」では、先行研究において「初めて北園が日本の伝統的な詩歌を振り返って見たという事件」（ジョン・ソルト）とも評される第五詩集『鯉』（1936年）を対象としたもので、日本の「伝統」的な「生活」の様子や、そのような「生活」の中に見られる〈物〉を重要なモチーフとする『鯉』が、人類学的な視点から日本の「伝統」を理解し、それによって得られた知見を活かした文学作品を創造する試みの産物であったことを解明した。第5章「『夏の手紙』論——「原始」的なものへの接近——」では、第六詩集『夏の手紙』（1937年）収録の作品が、当時の北園が関心を寄せていた、「具体的」なイメージの組み合わせによって形成される「原始」的な「思考」を表現上のモデルとし、視覚的なイメージの組み合わせによる直喩を用いて書かれた作品であることを明らかにするとともに、そうした「原始」的な「思考」への関心が、西脇順三郎の「土人」論に触発されたものであることについても検証を試みた。第6章「『サボテン島』論——引用・引喩という方法を中心に——」では、第七詩集『サボテン島』（1838年）に見られる引用や引喩が、エズラ・パウンドら同時代の英米の詩人の作品の受容を通じて、取り入れられるようになったものであることを指摘。同詩集中の引用・隠喩の典拠として、特権的な位置を占める西脇順三郎の著作との関わりについて考察した。第7章「『固い</p>	

卵』論—「あ」の役割を手がかりに—では、第九詩集『固い卵』(1941年)において、ジェイムズ・ジョイスの〈意識の流れ〉の方法に触発されつつ、一文字の感動詞「あ」の用法に注目することで、「捻転運動」をしながら展開する人間の意識をモデルとした表現を北園が試みたことを論じた。そして第8章『風土』論—〈郷土詩〉の試みについて—では、北園の〈郷土詩〉に関する議論や、第十詩集『風土』(1943年)から抽出される〈郷土〉文化認識が、大政翼賛会文化部によって提唱された〈地方文化運動〉や、〈大東亜共栄圏〉構想の中で展開された文化論と共通性を持つものであることを明らかにした。その一方で、北園の〈郷土〉文化への関心が、戦時下における単なる体制迎合的なものではなく、1930年代より継続する人類学や民俗学への関心の延長線上にあらわれたものであることを論じ、戦時下の北園克衛の位置づけに新たな視点をもたらす成果をあげた。

総じて本論文は、おおむね各章ごとに主な詩集を年代順にとりあげ、その表現を詳しく辿ることで、1920年代半ばから1945年にいたる北園の足跡を明らかにし、欧米のモダニズムの作品をどのような関心のもとに受容し、またその過程でどのような詩を生み出したのかについて、個々のケースに即して丁寧な考察を行っている。詩集ごとに変化していく北園の詩の表現方法に着目して、それらがいかなる背景のもとに生み出されたものであったのかを明らかにした点が本論文の特色となっている。

公開審査会においては、こうした達成が審査委員によって高く評価され、これまでアメリカにおける北園克衛への研究や関心に一步を譲っていた日本のアカデミズムに、新しい北園克衛研究が登場したと位置づけられた。その一方で、北園克衛を欧米モダニズムの規範からの逸脱という点において評価することの是非をはじめ、その足跡をモダニズムから伝統への回帰として理解することや、また戦時下の〈大東亜共栄圏〉構想との関わり方をどう理解するかという点についても、疑問が提示された。さらに、詩の形式を中心に論じた前半と、詩の内容に踏み込もうとした後半の論述のありかたや、西洋からのまなざしを北園がいかに内面化しあるいは相対化していたのかといった問題意識の所在についても議論がおこなわれたが、特にそのなかでも、北園が一時強い関心を寄せた俳句との関わりについて言及がないことについては、今後大きな課題となることが指摘された。しかし、これらは本論文の達成の意義を大きく損なうものではなく、むしろ今後の論者の新たな考察が期待されるところであり、以上の有益な課題は、申請者の今後の研究をさらに発展させるうえで、重要な指針を与えてくれるだろう。

申請者の論文は、北園克衛について、欧米モダニズム受容の問題との関連から、彼の作品にうかがえる特異な表現方法を解明した点において、今後、当該分野の研究者に学界でも注目されるだろう。北園研究に新たな展開をもたらす、優れた成果であると判断される。よって、審査委員会は全員一致で、本請求論文が「博士(文学)」の学位授与に値するものと認定する。

公開審査会開催日	2018年 1月 27日			
審査委員資格	所属機関名称・資格	氏名	専門分野	博士学位
主任審査委員	早稲田大学文学学術院・教授	十重田 裕一	日本近現代文学	博士(早稲田大学)
審査委員	早稲田大学文学学術院・教授	高橋 敏夫	日本近現代文学	
審査委員	早稲田大学文学学術院・教授	宗像 和重	日本近現代文学	
審査委員	早稲田大学文学学術院・教授	鳥羽 耕史	日本近現代文学	博士(早稲田大学)
審査委員	東京女子大学現代教養学部・教授	和田 博文	日本近現代文学	